発行月（1/1・4/1・7/1・10/1）

樫の木だより

2020年10/1
第100号

ひとり ひとり ひかる
きぼう

発行：樫の木福祉会（法人本部）
かしの木の会
一宮市冨田字砂原 2147
Tel/Fax　0586-63-2111　/　61-1200
樫の木福祉会　ホームページ
http：www.kasinoki.jp/

樫の木福祉会会報『きぼう』100号記念誌の発刊に寄せて

会報『きぼう』創刊号は、平成７年に誕生したと伺っております。本年ここに『きぼう』100号記念誌を発刊することができました。樫の木福祉会を応援しお支えいただいた関係各位に、厚く御礼申し上げます。

さて、何事も無から有を生じさせる陰には、将来を見越した夢とその実現に寄せた苦労が存在するものです。会報『きぼう』発刊においても、例外ではありません。その重責を担っていただいた方は、利用者の保護者を中心とする「かしの木の会」の方々です。「この子らの幸せを…」実現させたいとの強い願いの下に、25年に渡る活動を続けてこられました。『きぼう』91号から法人の会報として発行しておりますが、それまでのご苦労に対し「かしの木の会」の方々に、改めて感謝申し上げます。

新型コロナウィルス感染拡大の心配が続く中、障害者福祉事業の継続と充実に向けてさらなる努力を重ねてまいります。ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

樫の木福祉会　理事長　北川　登

かしの木の会コーナー

100号記念座談会

平成７年７月に創刊した会報「きぼう」は、今号で100号となります。これを記念し、創刊以来携わってこられた方々をお招きして座談会を開催しました。

コロナウィルス感染防止に配慮し２回に分けて行われた座談会では、創刊時のエピソードや苦労話から今の会報の課題、今後に向けての期待など、盛りだくさんのお話をお聞きすることができました。
今号では１回目の座談会の内容をお届けします。

日　時：令和２年８月１日(土)　９：30～11：30
場　所：プレハブ　希望
参加者：小塚峰子　氏：かしの木の会　前会長
　　黒原　勉　氏：かしの木の会　元会長
　　松田孝一　氏：かしの木の会　広報委員
　　石田和夫　氏：樫の木福祉会　元事務局長
　　橋本昭一　氏：樫の木福祉会　前事務局長
　　武田信之　氏：GHCかしの木　管理者
　　樫の木福祉会　広報委員長

武田　「きぼう」という名前はどんな思いでつけられたのですか。

小塚　最初の頃のまだ少人数の編集会議の時に、ある保護者の方が「障がいを持つ子どもを持っていても、前向きに希望を持って頑張りましょう。」ということを言われたのが始まりだったと記憶しています。他の団体は広報誌を発行しているのに樫の木にはなかったので、これでようやくスタートしたと本当に嬉しかったのを覚えています。

石田　一方的に上からというのではなく、集まったメンバーの中で選ばれた名前というのが大事なことですね。かしの木の会の趣意書も会員全員で作ったんです。そういう姿勢が「希望」(の名前をつけた時)から続いているのではないかと思います。

黒原　会の前身の「この子等の幸せを考える親の会」から会長を務められた故小塚清さんには、行政への申請の出し方やバザーの開拓など色々教えていただきましたね。会長自身まさに「きぼう」を持って意欲的に活動を広げられていたし、樫の木福祉会も同時に大きくなっていったと思います。かしの木の里を作る時は、親御さんが地域を回って寄付金集めをしたこともありましたが、地域の人には(既に開設されていた)作業所の存在も知られていなくて、情けない思いもしました。広報誌とは直接関係はありませんが、こうしたかしの木の会の成り立ちについても、この機会に伝えていただければと思います。

小塚　小塚清初代会長のお話が出ましたが、「きぼう」の表紙のタイトルの文字は小塚さんの親としての思いが込められた直筆です。これをずっと使っていただいていることは本当に嬉しいことです。
生活施設(里)を建てるときの寄付金集めについては、結局行政の方からストップがかかってしまいましたが、それなら自分たちが負担するから建ててほしいという親達からの切なる願いもあり、元々負担を強いるつもりがなかった親からの寄付もお願いして話がまとまったんです。

黒原　その時に寄付に協力してくださった方々のお名前が、会員としてずっと名簿に残っていたことで、後に会費集めで苦労することになるわけですが…。実はそういう経緯があります。

石田　初代会長小塚清さんの思いや会への貢献については、橋本さんが詳しいと思うのですが。

橋本　当時は一支援員だったので小塚さんと直接意見交換する機会はなかったのですが、福祉会が成長していくうえで、「この子等の幸せを考える親の会」が大きな原動力になってきたと思います。作業所や里を作る時、いつも親の会が行政に働きかけ“親自身も一生懸命努力するから、行政にも協力してほしい”というのが小塚清さんの考え方でした。「きぼう」の発行にも、地域の皆さんに、こういう青年たちがいるということと同時に、親たちも努力していることを理解していただきたいという思いが込められていたと思います。この座談会をまとめて「きぼう」に載せ

ることで、こうした思いや活動の積み重ねが、「きぼう」だけでなくかしの木の会や福祉会の根幹にあることを、新しい会員さんや職員さんに知っていただければと思います。

石田　小塚清会長からよく言われたのは、親御さんの意見や気持ちを大切にするということと、地域の人たちに積極的になじむ努力をすることでした。(会の運営についても)一部の役員だけでなく、会員全員の意見を反映させたいという姿勢でした。また橋本さんのお話にもありましたが、行政と手を携えていくことも大事にされており、樫の木交流会は現在も続いています。

黒原　小塚さんには“福祉課にしょっちゅう顔を出せ”と言われていましたね。ご自分も黙ってそれを実行されていました。今と違いこちらから行かないと情報が入らないし、働きかけないと何もしてもらえない時代でした。会報のことに話を戻すと、一時期の編集会議はたった２人で情報も少ないから記事も集まらず、石田さんに“もう少し（ページを）増やして”と言われたりしていました。今は載せる情報がたくさんありますね。施設も増えたし。当時は利用者さんの気が散るからと施設の見学もできませんでしたが、親としては様子が知りたかった。その点、今は会報で各事業所の様子がよくわかっていいと古い会員さんから言われます。

石田　利用者さんに熱心に向き合うあまり、そういう面が確かにありました。ノーマライゼイションの考え方が出てきて変わってきましたね。
目の前の利用者さんから学ぶことが最善だと教えられていたこともあり、研修や会議にもなかなか出席していなかった時期がありましたが、今日出席されている小塚峰子さんに何度も勧められて行くようになりました。

小塚　行かれた職員さんから“目から鱗”という言葉が出て、樫の木も頑張ってるけどよそも頑張ってることがわかったと。以前は少し閉鎖的なところがあったけれど、会報を発行したり、フェスティバルを開催したりと徐々にオープンになって、いい方向に変わってよかったなあと思います。

黒原　若い職員さんには、かしの木の会が色々な面で福祉会を支えてきたことを知ってほしいですね。今は契約の時代なので、親御さんが(子どもの居場所を作るために）努力する姿は知らないでしょうが。

小塚　かしの木の会がコツコツ貯めた収益を何度も福祉会に寄付してきていることを、若い方はご存じなくて残念に思うことがあります。

黒原　親御さんも同じように（福祉会を支えるという）かしの木の会の役割を知らない人が増えてきました。時代が変わったのだから仕方ないかもしれませんが。

武田　会報を発刊することで変わったことはありましたか。

黒原　「施設コーナー」というのを作って、各施設の様子がわかるようになったのは良かったと思います。自分の子どもの行っているところだけでなく、他の施設のこともわかることで共通認識ができた。
編集側としても「福祉会コーナー」「かしの木の会コーナー」というようにコーナーに分けたことでスムーズに行くようになった。あのスタイルができるまでが大変でした。

武田　プレハブができる以前の編集会議は、どこでされていたんですか。

黒原　かしの木の里の事務室でやった時期もあった。手書きの原稿をあれこれ相談しながら、ワープロで福祉会の事務の方に打っていただいた。かしの木の里ができる前は作業所の会議室でした。原稿は(テーマによって)それぞれにお願いして、それを(会報の形に)まとめて印刷していた。

石田　施設見学や研修会に参加した親御さんの感想も載せていましたね。

黒原　６ページの内容を埋めるのに四苦八苦していた時代です。委員会を開いても人が集まらなかった。

武田　第三種郵便を取得した経緯やご苦労についてはどうでしょう。会員数の確保とか一般に配布するためには施設の中のことだけではなく、文芸的な記事が必要だとかいろいろな縛りがあったということですが。

黒原　第三種にすると(郵送料が）安くなるということを職員さんから聞いて、郵便局に聞きに行った。予算も少ないし少しでも安くなればと思ったけど、500部以上の発行が条件だとかいろいろな縛りがあった。無料ではいけないというので値段をつけたり、そのお金はどこから取るのか聞

かれて“かしの木の会の会費から”と言ったら、会費の内訳について突っ込まれたりとすんなりはいかなかった。
福祉会の事務担当の方に何度も足を運んでもらって何とか(申請が)通ったんです。

小塚　郵送費は 15 円と安くなるけど、そのためには賛助会員を入れずに正会員だけで…

黒原　500 人

松田　第三種郵便の条件として、1 回 500 部以上年間 4 回発行、それから有料率 80%というのがあるんですが、会費の回収率がそれを満たせない。発送のたびに福祉会の担当が郵便局で追及されて、これは限界だということで見直すことになった。(これまでの経緯で)実質無料で配っている法人会員さんや（かしの木の里の設立時に寄付をしてくださったため名簿に残っている）会費をとれない会員さんが多いこともあって回収率を上げることは難しく、やめることになりました。(2009 年の)第三種郵便不正使用事件以来、（郵便局の）チェックが厳密になったことが大きなきっかけですね。

武田　以前は会報に文芸コーナーが存在する意味がわかりませんでしたが、今回座談会の資料を読んで初めて事情が理解できました。

黒原　文芸コーナーは、なかなか埋まらず苦労しました。橋本さんに映画や本の感想を書いてもらったり、俳句をしておられた職員さんの句を載せたり、保護者さんにレシピを提供していただいたこともありました。（原稿を作って印刷する作業も）パソコンもネットもなく、印刷機も立派なものではなかったから時間がかかりました。現在のパソコンやネットをプレハブで使える環境を整えるまでにも、福祉会にずいぶん骨を折ってもらっています。

小塚　第三種郵便利用をやめてお金はかかるようになったかもしれないけど、保護者中心から福祉会さん主体で発行してもらえるようになったのはよかったと思います。福祉会の職員さんが入られることで、職員さんも関心を持ってくださるようになったし。

武田　第三種適用の維持が難しくなって外したことで、福祉会が主体になることが可能になった。もともと福祉会が会報を出していないので、保護者の方が作ろうと思われたと言うことでしたが…

小塚　でもかしの木の会には保護者だけでなく職員さんも入っているので、はじめは職員さんも一緒にやっていたんですが、だんだん親だけになってしまった。負担も大きくなってきていたので、いい機会だからとお願いしたら理事長さんが快く引き受けてくださいました。

黒原　他施設と同じように福祉会主体で出せないかという要望は以前からあって、印刷の料金とかを福祉会の人に調べてもらったこともありました。数年前までは、プレハブと福祉会の 2 台の印刷機で印刷して手で折ってと、人手も時間もかかっていましたね。

小塚　今は外注になって楽になりましたが、大勢で集まって手折りして…という作業は大変ではあったけれど、親同士の交流の場にもなっていたなあと思います。

黒原　原稿の確認や訂正もメールでやりとりできるし、写真の大きさもスペースに合わせて調節できる。書体も以前はそれぞれがバラバラだったけど統一できて、便利になりましたね。

松田　福祉会の広報委員には、パソコンで編集作業ができるメンバーが何人かいて、その点は今後も安心です。

武田　メールになってからは原稿のやりとりのために会う必要がなくなったので、最近は逆に面と向かってするインタビューのようなアナログ的な記事も意識しています。
会報の果たしてきた役割として、各施設のことを伝えることのほかに、特にこの 10 年 15 年福祉制度が変わった時の情報提供があったと思いますが、情報の正確さや量でご苦労されたのではないでしょうか。

黒原　そのあたりはほぼ只井さんにお任せでした。今のようにネットで情報が出てくるわけではないので、保護者では難しかった。他のところでは出していないような情報もきちんとわかりやすくまとめてあって助かりました。

小塚　研修委員会で色々な先生をお招きして勉強しましたが、それを会報に載せることで来られなかった人にもいくらか分かってもらえたかなと思います。

石田　平成 15 年度にそれまでの措置制度ではなく支援費制度となり、利用者負担という言葉が出てきて不安に思う保護者の方がおられた。そこでかしの木の会が峰島先生【立命館大学教授（当時）】を招いて 4～5 回勉強会をして、それを会報に掲載した。最先端の情報を提供できたと思っています。当時、他施設の親御さんから“かしの木さんの広報誌は本当に情報がよく分かっていいです”と言われたことがありました。正しい情報をいち早く保護者の皆さんにわかりやすく伝えるという役割を、会報が果たすことができたと思います。

小塚　最後に一つ、平成 28 年の相模原市の事件の直後に、私と野崎さんと橋本さんの事件に対する記事を載せたんですが、その後福祉会の事務所に“今度の広報誌はとてもよかった”というお電話があったそうです。やはり、その時に合わせた記事は大事だと思いました。
前回号外として、各施設のコロナへの取り組みを出されたことはとても良かったですね。
今コロナ禍で、福祉会もかしの木の会も行事や活動がなかなかできない中で、広報誌はとても大事な役割を果たすと思います。是非とも発行を継続していただきたいですね。

武田　貴重なお話をありがとうございました。
「きぼう」の沿革は、かしの木の会や福祉会の根幹と深くつながっていることを改めて感じています。今後もよりよい会報作りのためにご協力・ご助言をよろしくお願いします。

お知らせ

・今年度のかしの木フェスティバルは新型コロナウィルス感染症対策のため、開催を見送ることになりました。来年度の開催を期して、皆様、健やかにお過ごしください。
・今年度の樫の木交流会の開催は未定です。開催の可否が確定しましたら追ってお知らせします。
・一宮市主催の「障害者ふれあいスポーツ大会」（旧称「一宮市障害者スポーツ大会」）は中止となりました。

創刊号にタイムトラベル

1995 年（平成７年）７月に発刊した創刊号には、どんなことが書かれていたのかちょっと探ってみました。

「この子等の幸せを考える親の会」
会長　小塚清氏
～会報発刊のご挨拶より抜粋～
“―保護者の老齢化にともない、親亡き後の障害者の生活の場所の必要性が真剣に叫ばれるようになりました。その実現に対し会の組織を改善・充実させることになり広報・研修、収益事業、リクレーションの３事業部会制を採用、発足に至りました。これにともない広報を発行し、長、中、短期的な行事計画等の発表をすると共に、会員の皆様方の御意見、御希望の発表の場と致したく存じます。会員の皆様方の一層のご協力をお願い致し広報発刊のご挨拶と致します。―”

広報について
～広報・研修事業部より抜粋～
“―広報は、会活動の案内や、実践の成果又は感想・意見を広く会員の皆さんにお知らせして行くことだと思います。ひとつひとつの願いや大きな目標を語り、手をつなぐ時、広報は情報としての力を発揮できると思います。「この子等の幸せを考える親の会」会員さんが本音で語ろう、まとまろう、大きな力をつけよう、という時節柄、意見交換の場としての広報の担う役目は意味深いものだと思います―”

いろいろな思いが詰まっていました。ちなみに、会報誌のネーミングは、当時もいろいろ案が出たようですが、「いつも希望をもっていますので」という会員さんの熱っぽい実感の伝わる発言が胸に響き満場一致と当時の記事に書いてありました。

～沿革～

年譜	樫の木福祉会の主な活動	かしの木の会の主な活動
1981年 昭和56年	知的障害者授産施設「樫の木作業所」開設	「この子等の幸せを考える親の会」が発足
1986年 昭和61年		樫の木作業所の利用希望者増加のため、新たに施設を建設していただくことを尾西市に陳情
1987年 昭和62年	心身障害者小規模作業所「阿古井工場」を市より委託	
1989年 平成元年	知的障害者更生施設「樫の木園」開設	
1990年 平成2年		尾西市内の保育園跡地の貸与を尾西市に陳情
1993年	樫の木作業所・樫の木園の定員を増員	
1994年 平成6年		総会にて「生活施設建設実行委員会」を発足
1995年 平成7年		組織を収益事業、広報・研修、レクリエーションの3つの事業部に再編
1996年 平成8年		生活施設建設準備会を発足
1997年 平成9年	知的障害者小規模作業所を開設	会活動の啓蒙と地域の皆さんとの交流の場として「樫の木ふれあいバザー」を開催 生活施設建設の推進のため臨時総会開催
1998年 平成10年		生活施設建設の起工式が行われ、推進委員20名が参加
1999年	生活施設について親の会会員と合同の会議をスタート	生活施設について樫の木職員と合同の会議をスタート
2000年 平成12年	知的障害者入所施設「かしの木の里」開設 かしの木の里に短期入所事業を開設 樫の木20周年記念事業として「かしの木フェスティバル」を開催	親の会からの陳情により、尾西市から入所施設に係る用地などを確保 「この子等の幸せを考える親の会」の名称を「かしの木の会」に改める。 樫の木20周年記念事業として「かしの木フェスティバル」を開催
2001年 平成13年		親の会の活動拠点としてプレハブ「希望」を設置
2002年 平成14年	重症心身障害者通園事業「らちぇっと」開設（かしの木の里内）	無認可作業所ピュアハウス開所式に参加
2004年 平成16年		臨時総会にて樫の木作業所の土地適正化のための資金援助を可決
2005年 平成17年	居宅介護等事業「きーぷ」開設（かしの木の里内）	広報、研修、バザー、イベント、あっとホームに委員会を再編 「麦の会」があっとホーム委員会に加入
2006年 平成18年	「グループホーム第1号「こぶしの家」開設 無認可作業所「ピュアハウス」が樫の木福祉会の所属になり、名称を「ステップ」に改める。	かしの木の会寄付もあり萩原店舗競売物件（ふらっと）を取得 福祉会のグループホーム設立準備委員会に会の代表が参加
2007年 平成19年	樫の木作業所、樫の木園が障害者自立支援法に移行 ケアホーム「みずきの家」開設 「一宮市相談支援センターゆんたく」開設	
2008年 平成20年	「尾張西部障害者就業・生活支援センターすろーぷ」開設 ケアホーム「あおきの家」開設	「てのひらの会」があっとホーム委員会に加入 臨時総会にて療育サポート事業に伴う改修工事に係る資金援助を決議
2009年 平成21年	「療育サポートプラザチャイブ」開設 ケアホーム「あざみの家」「はすみの家」開設	
2010年 平成22年	ケアホーム「さつきの家・かえでの家」開設 ケアホーム「ポプラ201」開設	
2011年 平成23年	児童デイサービス「そら豆キッズ」開設（チャイブ内） ケアホーム「みつばの家」開設	
2012年 平成24年	「フード＆ベーカリーわがんせ」がステップの店舗としてオープン ケアホーム「えんじゅの家」開設 「そら豆キッズ」が放課後等児童デイサービスに移行 「らちぇっと」が生活介護・児童発達支援へ変更 グループホーム「かりんの家」開設	わがんせ開店に際し、かしの木の会より寄付
2013年 平成25年	「らちぇっと」がかしの木の里内から隣地へ移転 「ゆんたく」が大和町馬引に移転 「喫茶らちぇっと」がらちぇっとの店舗としてオープン 「すろーぷ」がゆんたく事業所内に移転	あっとホーム委員会の所属団体「てのひらの会」解散 「どんぐりの会」があっとホーム委員会に加入
2014年 平成26年	グループホーム「オリーブの家」開設 グループホーム「けやきの家」開設	あっとホーム委員会の所属団体「麦の会」解散
2015年 平成27年	グループホーム「はなももの家」開設	
2017年 平成29年	生活介護事業所「らでうす」開設	あっとホーム委員会の所属団体「どんぐりの会」解散
2018年 平成30年	グループホーム「えんじゅの家」「みつばの家」廃止 グループホーム「あやめの家」開設 GHCはぎわら、GHCびさいを廃止、GHCやまとに統合。 名称をGHCかしの木に改める。	かしの木フェスティバルを福祉会との共催事業から福祉会への協力事業に変更
2019年 平成31年	グループホーム「なつめの家」開設	

法人コーナー⑦

令和２年度
新規採用職員研修を終えて

樫の木福祉会では、職員一人ひとりが、法人の職員であることに誇りを持ち、自らの業務に責任を持って、地域の中で障害福祉サービスを展開していけるよう、「人財育成カリキュラム」に沿って職員研修を計画し実施しています。ここでは、樫の木福祉会の職員研修の取り組みについてご紹介したいと思います。

例年、５月に実施していた新規採用職員研修も、このコロナ禍で開催が危ぶまれていましたが、７月に時期をずらし、かつ感染防止対策を徹底的に講ずることを条件に何とか実施することが出来ました。今年度は 16 名の新規採用者を迎え、理事長を筆頭に先輩職員が講師となり、３日間に渡って、分かりやすい丁寧な講義・実技指導が行われました。

新規採用職員研修は「理事長講話」、「基本理念」、「発達障害」、「医療・保健」、「重心・医療的ケア」、「介護技術」、「てんかん」、「就労」、「福祉会の職員としての心構え」、「グループワーク」の計 10 項目に及びます。
座学が多い中、受講者誰もが熱心に聞き入り、時には大きなうなづきが見受けられるなど、能動的に取り組んでいる姿が印象的でした。

また、発達障害や介護技術の講義では、体験学習や実技演習も組み込まれており、仲間と共に当事者感覚を体験することで、利用者さんの立場に立って考えることの重要性や、障害特性等について正しく知ることが日々の支援を下支えしていく、ということが理解出来たのではないでしょうか。

私自身、研修委員を拝命して何年も経ちますが、研修委員として様々な研修を企画・運営してきた中で嬉しく思われるのは、新任として研修を受ける立場だった若い職員が講師やアドバイザーを務める立場にまで成長した姿を見ることができることです。とても誇らしい気持ちです。これからも利用者さんと楽しみながら成長を続けていって欲しいと願うばかりです。

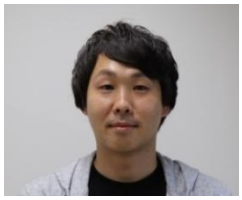
グループワークのひとコマ

（写真撮影のためマスクを外してもらっています）

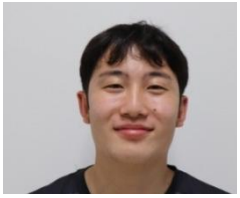
さて、福祉会では今後も基礎研修や救命講習をはじめ、中級職員研修や管理職研修、外部講師による研修など随時企画していきます。
研修を通して共に学び、共に成長することで、どんな人でも受け入れ、共に暮らすことの出来る「地域づくり」に邁進していけたらと考えています。

樫の木福祉会　研修委員
かしの木の里　若山正憲

法人コーナー②
ニューフェイスのご紹介



所属：　らでうす
名前：　南　祥也
利用者さんの気持ちを理解できる支援員になりたいです

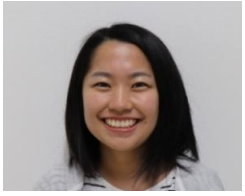


所属：　らでうす
名前：　小島　祐樹
明るく笑顔で対応し共に成長できる支援員になりたいです

所属：　きーぷ
名前：　河村　亜実
明るく笑顔で頑張っていきます。よろしくお願いします

所属：　樫の木作業所
名前：　奥村　秀美
一生懸命頑張りますのでよろしくお願いします

所属：　そら豆キッズ
名前：　山中　康二朗
これから、よろしくお願いします



所属：　かしの木の里
名前：　河村　祐衣
利用者さんの気持ちを理解できる支援員になりたいです

所属：　樫の木園
名前：　二村　浩史
仕事も健康も気を付けて頑張っていきたいです

所属：　すろーぷ
名前：　潮崎　友一
何事も学ぶ心を大切に頑張りたいです

所属：　らちぇっと
名前：　清水　香代
精一杯、頑張ります。よろしくお願いします

所属：　ステップ
名前：　佐渡　俊之
利用者さんに寄り添えるよう心がけていきます

所属：　療育サポート事業
名前：　高島　真里
常に学ぶ姿勢を大切に頑張りたいと思います

所属：　療育サポート事業
名前：　小島　浩司
頑張ります、よろしくお願いします

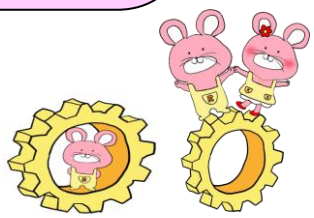
所属：　GHC かしの木
名前：　石原　卓哉
利用者さんが安心できるような支援をしていきたいです

所属：　らちぇっと
名前：　花田　しのぶ
健康第一で頑張ります

所属：　かしの木の里
名前：　岩下　孝広
頑張ります！

所属：　GHC かしの木
名前：　兼氏　理香
小さな気づき、早い対応を大切に自分らしい支援をしていきたいです
令和元年度採用

所属：　すろーぷ
名前：　小島　美恵
心に余裕をもって丁寧な対応を心掛けていきます
令和元年度採用

所属：　樫の木園
名前：　鈴木　里佳子
明るく楽しくをモットーに頑張ります
令和元年度採用

多くの仲間を迎えることができて、とてもうれしく思います。
これからよろしくお願いします！！